

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

- 言葉の周辺 山岡洋一
 - ー モラル・ハザード再考
原発に関して東電がとるべき行動をとらなかったのはなぜなのか、再発を防ぐために何をすべきかを考えるとき「モラル・ハザード」の概念が参考になる。
- おすすめしたい韓国の本 福田知美
 - ー 地図の外に行軍せよ
韓国で「ネチズンが会いたい人 1 位」に選ばれた女性が緊急人道支援を行った5年間の報告を紹介する。
- モンゴルの翻訳事情 (2) 北村彰秀
 - ー 出版翻訳 (日本文学等)
「竜の子太郎」「三四郎」「学問のすすめ」などの作品が翻訳出版されている。
- 翻訳とは何か—研究としての翻訳 (その10) 河原清志
 - ー 翻訳における原文からの事態構成 : Lexical Grammar
翻訳において正確な原文理解は不可欠だが、それをいざ指導するとなると一筋縄ではいかないことが多い。英日翻訳であれば、英語を英語で理解したものを日本語で表現すればよい、と言ってみても、「英語を英語で理解する」とは一体どういう言語的営為なのかについて、言語学や英語教育学が正面から答えていないのであれば、翻訳教育にその知見を導入することはできない。
そこで、本稿では筆者が理論的基盤にしているひとつである多義語に関するコア理論を英文法理論に応用した Lexical Grammar (語彙文法) を紹介し、語彙の意味に立脚して「英語を英語として理解」しながら事態構成を行うプロセスを説明し、翻訳教育へと展開する手順を示したい。

翻訳通信 〒216-0005 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC012007@nifty.ne.jp
(アットは@に変えてください)

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

モラル・ハザード再考

「震災の不条理に原子力施設の事故が加わると、もうこれは人間の耐えられる限度を超えていくだろう。原子力の問題が難しいのは大事故を起こしたら終わりだからですよ」高村薫（新潟日報社特別取材班著『原発と地震 ―柏崎刈羽「震度7」の警告』講談社、209ページ）

高村薫がこう述べたのは数年前だ。2007年7月の中越沖地震のとき、東京電力の柏崎刈羽原発で火災が発生し、動いていた原発4基がすべて止まった。その数か月後の発言である。

現状はまさにそういう状況になっているというのが、大方の見方ではないかと思う。これだけの事故を起こしたのだから終わりだと。しかし、そうではないという見方もあるようだ。「ただちに」健康被害ができるような状況にはなっていないのだから、「大事故」ではないということのようだ。そして、原発がなければ電力供給が不足し、現在の生活水準を維持できなくなると主張されている。原発事故で生活の基盤を根こそぎ破壊された人がたくさんいるというのに、こう主張されているのである。

原子力はもうダメだというのは素人さんの意見であって、技術を後退させることはできないとも主張されている。事故を防ぐ技術を発達させるしかないのだという。科学技術に関する一般論としてはその通りなのだろうが、原発技術という具体論にこの論理が適用できるとする理由を示さないかぎり、笑うべき暴論にしかならない。多数の技術のなかから取捨選択を行うのは当然であって、原発技術を選ばなければならない理由がはたしてあるのだろうか。

これにかぎらず、東電をはじめとする電力業界の主張には素人には理解しにくい点がたくさんある。そして、東電の行動には理解しにくい点が多い。とくに理解しがたいのは、とった行動ではなく、とらなかった行動だ。原発施設の中と外に分けてみていくことにしよう。

原発施設内では、事故防止のためにとるべきだったのにとらなかった行動がいくつもある。たとえば、今回の津波の規模は想定外だったと主張するが、想定を設けたのは50年ほど前だ。その後に想定の高さを指摘されても見直さなかった。全電源喪失と炉心溶融の可能性を指摘されても、動かなかった。利

害関係のない研究者から指摘を受けても、誰よりも事故防止に積極的なはずの東電が動かなかったのである。地震と津波に襲われた後の初動対応に問題があったというが、それ以前にとるべき行動をとらなかったことの方が不思議ではないだろうか。

原発施設外では、事故後に被害の拡大を防ぐための行動をあまりとらなかったようだ。この点は、自宅か自分が経営する企業の施設で事故が起こり、周辺住民が避難を強いられたときに何をするかを考えてみるとよく分かる。避難先に駆けつけて、できることは何でもしようとするのではないだろうか。報道をみるかぎり、東電はごく常識的な対応を怠ったようだ。東電の社員が駆けつけて、炊き出しをしたらどうか。保養所や社宅、社員寮などを提供したらどうか。社有地に仮設住宅を建設したらどうか。避難区域内の家畜やペットの世話をしたらどうか。校庭や公園で子どもたちが安心して遊べるように最善の措置をとったかどうか。そうした点はすべて政府と地方自治体が対応するはずだと考えて、他人事のような姿勢をとっているというのが、現実ではないだろうか（マスコミがそれほど報じていないだけという可能性はゼロではない）。

要するに、東電は事故の発生確率を引き下げ、事故後に被害の拡大を抑える行動をとる責任を果たしてこなかったようなのだ。そうであれば、東電バッシングが起こるのは当然であり、メディアの報道は不十分だとすら思える。問題は東電がとるべき行動をとらなかったとすればなぜなのか、再発を防ぐために何をすべきかである。この点を考えるときに「モラル・ハザード」の概念が参考になる。

モラル・ハザードは「倫理観の欠如」ではない

モラル・ハザードという言葉は金融危機のたびにメディアに登場している。危機の原因になる行動を理解し、再発防止策を考えるうえで有益な概念を示す言葉だからだが、誤解と誤訳を繰り返してきた言葉でもある。通常は「倫理観の欠如」などと訳され

ているが、これは間違いであり、概念の本質を見失うことになりかねない。この点については「翻訳通信」2003年5月号 第2期第12号)で指摘したが、今回の原発事故を理解するうえでも役立つ概念だと思うので、再度とりあげることにしよう。

モラル・ハザードは本来、**physical hazard** (実体的危険) と対比される保険用語である。火災保険を例にとれば、ある建物で火災が起こる可能性はつねにある (これを **physical hazard** という)。だから保険を掛けるのだが、その結果、所有者の損得勘定が変わり、火災を防ぐ努力や火災が発生したときに被害の拡大を防ぐ努力を怠ることになりうる。保険があることで、火災が発生する確率と被害が大きくなる確率が高まるのである。これを保険用語では **moral hazard** と呼ぶ。要するに、保険を提供する側からみたときに、どこに危険があるかを示す言葉なのである。

金融危機のときにモラル・ハザードが問題になるのは、政府が銀行に預金保険を提供しているからであり、「大きすぎて潰せない」金融機関に対しては、預金保険の枠を超えて政府が救済に乗り出すはずだとみられているからである。政府が (最終的には国民が) 金融機関に保険を提供しており、その結果、金融機関は経営破綻を防ぐ努力を怠り、高リスクの取引で利益を増やそうとする危険がある。これがモラル・ハザードである。金融機関経営者の「倫理観の欠如」を非難する言葉ではなく、ハイリスク・ハイリターン追求を促す仕組みを表す言葉である。

この概念を使って原発事故に対する東電の対応をみていくと、上述の疑問が解けるのではないだろうか。原発事故の損害賠償については原子力損害賠償法という法律で、事業者 (つまり東電) が責任を負うことになっているのだが、「異常に巨大な天災地変」で事故が起こった場合には事業者は賠償責任を免除され、政府が保険を引き受ける仕組みになっている。そのうえ、東電はまさに「大きすぎて潰せない」とみられているので、大手金融機関と同じく、事故が起これば政府が何とかしてくれる考えるよう促す仕組みが二重に作られていたといえるはずである。このため、事故の防止に真剣に取り組もうとはしなくなるし、事故が起こったときも他人事のような対応になる。こういう見方を生み出す仕組みがモラル・ハザードである。

事故の直後に今回の地震と津波が「想定外」だっ

たと東電が強調した理由も、以上の点を考えればよく理解できるはずだ。技術の観点からの発言ではなく、法律と経営の観点からの発言だったはずである。つまり、今回の事故は「異常に巨大な天災地変」によるものだから、免責されるべきだという主張だと考えるべきだろう。損害賠償は政府の責任であって、東電の責任ではないというわけだ。この見方からすれば、東電の社員が避難所に駆けつけて被害の拡大を抑えるためにできるかぎりのことを行う理由がないといえる。保養所や社宅を提供する理由もない。東電は当事者ではない。すべて政府の責任なのだから。

だが、今回の原発事故では、モラル・ハザードは東電だけに止まらなかったようにも思える。東電の思惑通り、政府が保険を引き受けていけば、今後は政府が当事者になり、原発の安全性を確保するために全力をつくすはずだと安心できたかもしれない。ところが、政府はそういう姿勢をとっていないようなのだ。東電の免責を認めるのは、「国民感情から許されない」と判断し、原子力損害賠償法の規定はともかく、東電に損害賠償の責任を負わせることにしたからだ。個人的な感情では、たしかに東電に免責を認めるなどとてもないと思う。しかし、日本は法治国家なのだから、法律にしたがって方針を決めていくべきだとも思う。悪法も法なのだから、法律上の議論がないまま、「国民感情」で方針を決めるのはとても危険なことだとも思う。法律上、東電が賠償責任を負うというのは正しい判断なのか。法律については疎いので、この点はよく分からない。だが、ここで指摘したいのは、東電につづいて、政府も事実上、当事者としての責任を回避したことである。東電も政府も、最終的な責任は自分にはないと考えているようなのだ。

二重のモラル・ハザードだともいえる状態。こういうことが許される仕組みを変えなければ、原発事故は再発しうる。そのときの原因は津波だとは限らない。

地図の外に行軍せよ

ここでは、私が興味深いと感じた韓国の本や今、韓国で話題の本を毎月紹介していく。この記事を通して、少しでも多くの読者の方に韓国の良書を知っていただき、韓国に親しみを持って頂ければ嬉しく思う。今月は『地図の外に行軍せよ』という本を紹介していく。

本書の概要

本書は、韓国で「ネチズンが会いたい人1位」「平和をつくる100人」などに選ばれ、2004年には「YWCA 若い指導者賞」を受賞した女性、ハン・ビヤが、国際NGO ワールド・ビジョンの一員として緊急人道支援を行った5年間の報告書である。5年間の間、彼女が派遣された国は、アフガニスタン・マラウイ・ザンビア・イラク・シエラレオネ・ネパール・パレスチナ・イスラエル・2004年スマトラ島沖地震の被災地・北朝鮮など多岐にわたる。彼女の主な任務は広報で、現場の写真と記事をワールド・ビジョン国際本部、韓国事務室、世界の重要な通信社及びメディアに送り、できる限り多くの現場にインタビューすることだった。コード・レッド（「危険」を意味する）が発令された危険な場所で一晩を過ごしたり、無数の地雷が埋められた場所を移動するなど、常に危険にさらされながら任務を遂行している彼女の姿が記録されている。

1本の電話から緊急人道支援要員に

世界一周旅行を終え中国で勉強中だったハン・ビヤに1本の電話が入った。緊急人道支援のチーム長として働かないかというオファーだった。彼女が緊急人道支援要員として難民を助けることを決意したのは、弱者の立場を理解していたからだという（中学の時に父親を亡くし、経済的に苦労したため）。救護の世界は競争の世界ではなく、愛や分かち合いの世界であり、そのような世界に足を踏み入れてみたかった、と彼女は語る。実務経験が全くないことからチーム長を務めることに不安を感じるが、最初から専門家である人は1人もいない、と自らを奮い立たした。

生きてくれてありがとう

ビヤのチームがアフガニスタンのある村に行った時、そこには栄養失調で今にも意識を失いそうな子供達があった。いてもたってもいられなくなったビヤは子供達を医者に見せるが、生き延びるのは難しい

と伝えられる。ところがビヤ達の懸命な看病の結果、1人の子供が意識を取り戻して笑顔を見せた。ビヤ達はその子供に行ったことは、複雑な手術でも高い治療でもなく、2時間に1回ずつ粥を食べさせることだった。全ての子供をその場で救うことは難しいが、自分達の努力によって生き延びる命も確かにあると彼女が実感した瞬間だった。

体の価値は0円

驚くべきことに、万が一、緊急人道支援要員が人質として捕まったとしてもその体の価値は0円だ。もし人質をとるような勢力に金を渡せばその集団の力が強くなり、結果的にワールド・ビジョンが救うべき人々を苦しめてしまうことになるからだという。そのため職員が人質として捕まれば、何とか安全に解放されるよう努力はするが、犯人側が金を要求した時点でもうそれ以上は交渉不可能になる。それ以降のやり取りは事件が起きた国とその職員の母国関連者の間で協議される。幸い、ビヤの任務中に人質になった職員はいなかったが、緊急人道支援要員はこのように非常にシビアな環境にいつも身を置いているのである。

地図の外に出ていこう！

本書は緊急人道支援要員の5年間の報告書であると同時に、小さい力で世界を変えようとする全ての人に送るハン・ビヤからのエールでもある。彼女は韓国に生まれながらも、その活動の場を自国だけにとどめず世界中を舞台に活躍してきた。韓国人やアジア人としてではなく、世界人として世界中の全ての人々と兄弟・姉妹になりたいと願うハン・ビヤ。彼女はこれからも国境に縛られることなく、そのパワフルな行動力で世界中に愛と分かち合いの精神を伝えていくことだろう。

題名：地図の外に行軍せよ

原題：지도 밖으로 행군하라

頁数：307頁

著者：ハン・ビヤ

出版社名：図書出版青い森

発行：2005年9月8日

著者紹介：1958年、ソウル生まれ。弘益大学英文学科卒業後、アメリカのユタ大学コミュニケーション学科で国際広報学の修士課程を修了。

出版翻訳（日本文学等）

前回、ハリー・ポッターについて触れたが、そのシリーズの2冊目の翻訳がすでに出ている。1冊目と同様、ハードカバーの立派な本であり、そのため高価でもある。この値段では、モンゴルでベストセラー入りすることは難しいのではないかと思う。おそらく、翻訳の働きの陰には、この作品をモンゴルに紹介したいと思っている方々がいることと思う。

児童文学では、最近ではアンデルセンも含め、世界の主な児童文学がモンゴル語で読めるようになって来た。

日本の児童文学では、「竜の子太郎」がかなり前から出ていた。この作品は国際的な賞も受賞しているため、海外でも注目されているものと思われる。モンゴル語訳はロシア語訳からの重訳であると思うが、確認していない。児童文学ということでもあり、社会主義体制下のモンゴルでも読まれたものと思われる。

最近、この「竜の子太郎」の新しい版が、カラーの表紙付きで出た。この本はなぜか、翻訳者名が書かれていない。（どのような理由であれ、やはり、責任の所在をはっきりさせるために、書いておくべきであろう。）また、表紙の絵の主人公は和服とも洋服とも言いがたいものを着て、下駄ともサンダルとも言いがたいものをはいている。また、民家の前の平地は、田畑ではなく、草原になっている。やはり、現在のところモンゴル人画家に、日本に関する深い知識を期待するのは無理ということかもしれない。

この本の活字は、従来の教育用活字でもなく、印刷物に普通に使われる活字でもなく、その中間的なものを使っていて、独特である。活字の使用についても、民主化以後のモンゴルは、自由になってきたということかもしれない。

最近、同じ著者の「ちいさいモモちゃん」も訳されている。これは日本人による翻訳である。そのためか、表紙や挿絵にも、特に違和感を覚えるようなものは見られない。

大江健三郎の「遅れて来た青年」の翻訳も、かなり前から出ていた。ただしこれはロシア語訳からの重訳である。モンゴルも最近ではかなり立派な日蒙辞典が出ているが、少し前の時期になると、直接日本語から訳すのは困難であったものと思われる。

「遅れて来た青年」は資本主義社会の醜い面も描かれていて、そのような理由からも、ソ連やモンゴルで翻訳出版されたものと思われる。

少し前に、安部公房の「砂の女」のモンゴル語訳が出た。この作品は私自身、読んでもほとんど感動を覚えなかった作品である。しかし、今改めて考えてみるのであるが、モンゴルが秘境と思われていた時代もあったし、革命直後は日本とほとんど情報の行き来がなかった国である。また、最近では、モンゴルからアメリカや韓国に出て、長期滞在、あるいは永住するモンゴル人も出てきた。このことを考えるときに、「砂の女」の、異なった社会に入っていくという話は、大きな問題提起であるに違いない。この作品を復習してみる必要があるのではないかと、最近思わされている。

夏目漱石の作品では1990年に「三四郎」が翻訳された。ちょうどモンゴルの民主化の始まるころである。民主化により、モンゴルは社会主義建設、共産主義社会の建設という理想を失った。また、マルクス・レーニン主義というものが、社会や個人のよりどころではなくなってきた。そのような中で、この小説の、はっきりした目標がなく、明確な人生の方向性のない主人公の姿は、現代の青年、あるいはすべてのモンゴル国民に対する、1つの大きな警告、あるいは強いメッセージを発するものとなっている。また、小説の最後に完成する美人画とモンゴルの現在の姿を重ねて読む読者もあるのではないかと思う。美人画に描かれた女性は、決して模範的女性ではない。翻訳者が民主化による社会の変化というものをどこまで予測してこの作品を訳したのかはわからないが、序文の中に、「当時の日本社会の状況がこのような主人公を生み出した」と翻訳者が言及していることは、やはり注目すべきであろう。そして、この作品は翻訳者が予想していなかったような意味を持ち始めているのではないかとわたしは思う。

なお、この本の表紙も、寝巻きのような和服を着た女性、日本庭園のような風景等、かなりわれわれにとっては違和感を覚えるものである。三四郎の服装や手に持っているものも、どこことなく不自然である。この絵は、日本はモンゴルとは別の世界であるということを強調するようなものになっている。しかし、漱石の書こうとしたものは、特殊な世界ではなく、かなり普遍的なものである。小説の内容や日本の姿を正しく伝えてほしいと思うのであるが、日本語を学んだり、日本の小説を読んだりするのは、日本の独特の文化や社会に対する興味が動機となっていることが多いということも否定できないであろう。

民主化のころまでは、本を出版する場合、出版部数も記すことが多かった。「三四郎」の奥付のところには、1万部印刷したと書かれている。

漱石の作品では、「我輩は猫である」も翻訳が出ている。それ以外にも、1つか2つあったと思う。

福沢諭吉の「学問のすすめ」のモンゴル語訳についても触れなければならない。この作品は、日本でベストセラーになりながら、その後ほとんど読まれなくなり、アジア各国で読まれるようになって来た。ちょうど連続テレビ小説「おしん」のような運命をたどった作品である。（ただし、最近では日本でも斎藤孝氏の現代語訳が出て、多少読まれているようであるが。）モンゴル語訳の翻訳者は文語の原文からではなく、斎藤氏以前に出た現代語訳をもとにして訳したようである。「自活できるようになっただけで満足してはいけない」と説き、服装に対する注意まで書かれているこの作品は、場所や時代を超えた魅力を持っている。しかし、それと同時に、アジアという地域、また、民主化以後の新たな国づくりの時期という時代の中で、この翻訳は生きていくものであると思う。ただ、かなり高価であるのは残念である。なお、「三四郎」も「学問のすすめ」も、翻訳者は女性である。

翻訳者トゥムルバートルについても書いておきたい。彼の翻訳としてはまず、「空飛ぶオートバイー一本田宗一郎物語」がある。この原作は、本田宗一郎氏の自伝を子供向けに書き換えたものであると思うが、翻訳も子供向けの表紙になっている。（モンゴルでは翻訳書も数が限られているため、むしろ、大人にも読まれるような表紙にしたほうがよいのではないかと思われ、その点は残念である。）これは短いものであるが、読んで面白いし、また、元気の出る作品である。日本の自動車産業についての理解を深めることもできる。

彼はまた、新渡戸稲造の「武士道」も訳している。「武士道」の原著は英文であるが、トゥムルバートル氏は、日本語訳からモンゴル語に訳したようである。彼の翻訳は、大学でモンゴル語を専攻した日本人であれば、辞書なしで読めるほどやさしい。「やさしい文章で」というのが彼の方針のようである。文章をやさしくすると、ある意味で文学的質は下がるかもしれないが、一般により多くの読者を獲得できるというメリットがある。おそらく、これが彼の意図したところであろう。

その他の日本の作品では、司馬遼太郎、開高健などのものが訳されている。また、源氏物語も、まだ全訳ではないが、翻訳が出ている。

その他、多少変わったところでは、「ホーキング、

宇宙を語る」や「ノストラダムスの大予言」の翻訳も出ている。ホーキングはあまり読まれなかったようであるが、ノストラダムスは、少なくともある程度モンゴル人の関心の的となったようである。

モンゴルは詩作の盛んな国である。そのためか、ダンテの神曲や、シェークスピアのソネット集の翻訳も出ている。詩の翻訳は優れたものもあり、たとえばプーシュキンの長編詩「金の魚」の訳（翻訳者はモンゴルの有名な作家ダムディンスレン）は原文よりも優れていると言われている。

また、満洲語の作品の翻訳が読めることはモンゴルならではである。有名な歴史書である満洲実録の翻訳、また満洲民族の最もよく知られた文学であるニシャン・サマンの書の翻訳が最近出ている。ただし、満洲実録の翻訳は、清朝時代の翻訳に基づいたものと思われる。

翻訳は外の世界に向かって目を開かせてくれるものである。しかし、それとは別に、あるいはそれと同時に、原作が異なった時代や場所に投げ込まれることによって、新しい意味を持ち始めたり、予期しない影響を及ぼしたりすることがある。ほとんど注目されなかった作品が注目を集めるということも、ありうることである。このあたりに翻訳という仕事の1つの醍醐味があるのかもしれない。いろいろな作品のモンゴル語訳が新しい世界を切り開いていくことを期待したい。

お知らせ

拙著「東洋の翻訳論」、「続 東洋の翻訳論」、「東洋の翻訳論Ⅲ」は下記の書店で扱っております。各冊とも735円（税込）という安価ですのでぜひお求め、お読みください。

(株) 朋友書店

〒606-8311 京都市左京区吉田神楽岡町8番地

TEL : 075-761-1285

FAX : 075-761-8150

hoyu@hoyubook.co.jp

なお、本の内容は以下にあるとおりです。

<http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/ron/bn/toyo3.html>

翻訳における原文からの事態構成 : Lexical Grammar

翻訳において正確な原文理解は不可欠だが、それをいざ指導するとなると一筋縄ではいかないことが多い。英日翻訳であれば、英語を英語で理解したものを日本語で表現すればよい、と言ってみても、「英語を英語で理解する」とは一体どういう言語的営為なのかについて、言語学や英語教育学が正面から答えていないのであれば、翻訳教育にその知見を導入することはできない。

そこで、本稿では筆者が理論的基盤にしているひとつである多義語に関するコア理論を英文法理論に応用したLexical Grammar（語彙文法；以下LGと表記）^{註1}を紹介し、語彙の意味に立脚して「英語を英語として理解」しながら事態構成を行うプロセスを説明し、翻訳教育へと展開する手順を示したい。

翻訳とは何か—等価構築行為としての翻訳

翻訳とは等価を構築し実現する営為である。より精確には、訳者が原文から意味を構築（事態構成）した表象と等価であると看做した訳文を作成することにより「等価」を主体的かつ選択的に実現する営為であることは、以前の論稿で論じてきた。逆に言うならば、結果として訳出された翻訳物は、等価構築行為の産物であって、訳者の心的表象を反映しているものとして、等価表象の手がかりともなりうる（なお、Toury 1995）。

このことを認知言語学の立場から論ずるならば、「言語表現を、認知主体から独立した自立的な記号系としてとらえるのではなく、外部世界の主体的な解釈の直接的な反映としてダイナミックにとらえていく」（山梨 2000, p. 11）、つまり、人が（言語表現も含めた）外界をどう捉え、それをどのように言語化しながら意味を紡ぎだしているかに関するメカニズムを解明し、日常言語の表現を、主体が外部世界を解釈していく認知プロセスの反映として規定してゆく、という立場からするならば、翻訳における訳出物も主体的な等価構築プロセスを反映したものであるということができる。

ところが、一般論としてこのように言えたとしても、翻訳を指導する場面においては、原文と訳文を平行に用意し、この訳文が「等価」表現の1つの候補であると提示しても、学習者に了解してもらうことはなかなか難しい。それは、訳者自身が、なぜそのように訳せるのかについて意識的に説明できないことも理由のひとつであろう（翻訳作業は自動化しているため、訳者にとって意識的な説明は困難

であろう）。やはり、（1）どのようなプロセスを経てそのような心的表象を得、（2）その表象を基にどのように訳文を産出するのかについて、明示的な説明が必要となる。そこで、（1）原文理解のプロセスを説明するひとつの手段として、このLGを導入する、というのが本稿の趣旨である。

Lexical Grammar（語彙文法論）

LGは元々、＜語彙＞に着目して＜文法＞を捉えなおそうという試みである。文法に意味を回復する理論である、と言ってもよい。その背後には、とかく無味乾燥だと思われがちな従来の文法に、生き生きとした意味の息吹をもたらそうという発想がある。

このLGを全面的に体系化したものに、佐藤芳明・田中茂範『レキシカル・グラマーへの招待』（開拓社）がある。慶応大学の田中教授のもとで、佐藤氏と筆者は教育英文法としてLGの開発をともにやってきた。英語教育から英文法理論を再編したと言ってもよい。

レキシカル・グラマーは、語彙の観点から文法を捉える試みである。have、be、give、a、the、in、on、can、will、what、which、if、to、thatなどは文法項目と関係する語彙であり、見方を変えると、これらの語彙のそれぞれに文法的情報が内在しているということになる。[...] 理論的前提としては、認知言語学のスタンスが重要な示唆を与える。とりわけ、言語は人間の世界の捉え方を反映しているがため、言語には意味的動機づけがあるという見解は極めて重要である。こうした理論を背景にするレキシカル・グラマーは、語彙的な意味と構文的可能性に着目する文法であり、語彙的な意味が構文の多様性に一貫性を持たせようとするところにその最大の特徴がある。語彙的な意味のことを「コア (lexical core meaning)」と呼ぶが、コアと構文的可能性の相互関係に着目するのがレキシカル・グラマーの特徴である。

(佐藤・田中 2009, p. 11)

ここに出てくる認知言語学のスタンスはその特徴として、①「心的表象」(mental representation)と②「情報処理」(information processing)の2つを挙げることができ (ARCLE編集委員会 2005, p. 192)、この①を正面から語彙のレベルで研究したのが多義語の意味構造の研究であり、この「コア理

論」は認知的スタンスに立脚した単義説ということが出来る。②に関しては田中教授は「チャンク」という理論装置を導入して、プロセス文法を提唱し²、かつて我々3名で『チャンク英文法』（コスモピア）を上梓した。そこで、本稿でも、①コア理論、②チャンク、という理論を用いて、説明を試みたい。

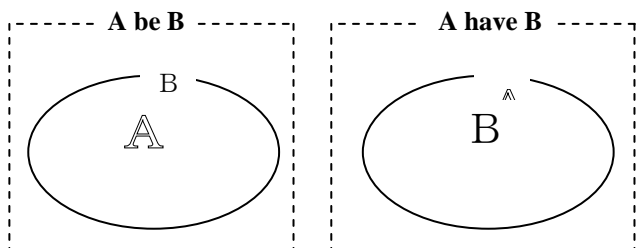
* * *

文法に意味の息吹を！—L Gの活かし方（1）

まずは、翻訳とは直接関係ないかもしれないが、田中・佐藤・河原で2007年度に1年間連載をした雑誌『英語教育』（大修館）で筆者が担当した2007年9月号の論稿を一部加筆・修正して掲げる。英語教育の「実践指導例」として、BE・HAVE動詞、および、準動詞を取り上げて、教育現場でそのまま使える応用例を示している。

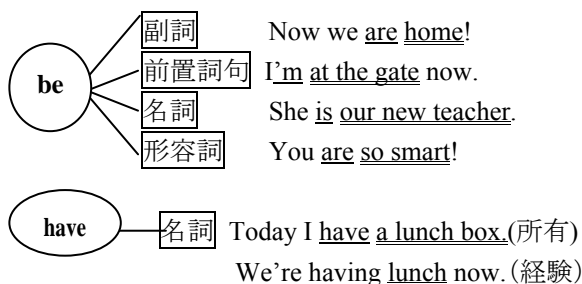
BEとHAVEから出発！

英語を習い始めて1ヶ月もしない間に登場するのが、このBEとHAVE。超基本語でありながら、なかなか奥の深いことばである。まずはコアから確認しておこう。コアの解説と図は『Eゲイト英和辞典』参照。



be	: 何か(A)がどこか(B)にある
have	: Aが何か(B)を自分のところに持つ

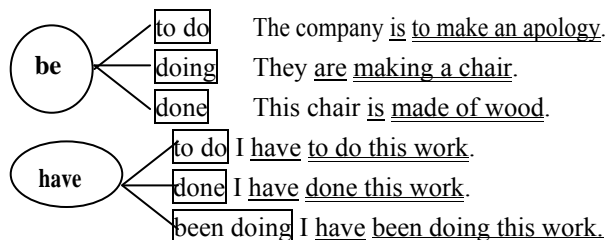
Aはbeやhaveの主語を表している。そしてBはbeやhaveのあとに続く部分で、ここに多様な文法形式が来ることで、豊かな文法表現が生まれる。まずは通常の動詞としての典型的な使い方を確認しよう。



少し確認しておこう。BEのコアは「何かはどこかにある」で、BEの後ろに副詞や前置詞句が来る場合は<ニアル>、名詞や形容詞が来る場合は<デアル>というふうにBEの意味をとらえるとわかりやすい³。また、HAVEのコアは「何かを自分のところに持つ」で、何かを所有して持つ場合と、経験して持つ場合がある。母親が赤ちゃんに対して、I'm happy I have you. (生まれてくれて嬉しいわ) という場合は、所有とも経験とも明瞭に分けられないが、youと一緒にいる状況をhaveしているというふうに、コアから考えればわかるだろう。

BEとHAVEの構文ネットワーク

今度はBの部分に来る準動詞を見てみよう。

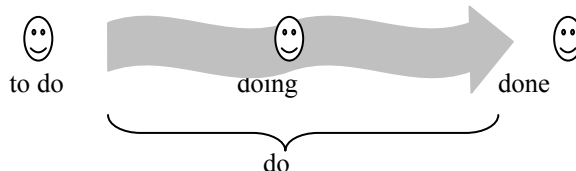


改めて考えてみると、BEやHAVEは、上記のように準動詞との組み合わせによって構文の可能性が広がるのだ。be to doは「これから～する予定だ」、be doingは「現に～している」、be doneは「すでに～されている」、have to doは「これから～しなければならない」、have doneは「すでに～してしまっている」、have been doingは「ずっと～してきている」という意味合いである。では、ここで準動詞についてまとめておこう。

準動詞の意味と構文ネットワーク

準動詞というと、to do（不定詞）、doing（現在分詞・動名詞）、done（過去分詞）のことをいう。do（原形）もあわせて、これらのコアを確認しておこう。

to do	(これから)～する
doing	(現に)～している
done	(すでに)～して[されて]しまった
do	(単に)～する



まず、それぞれの基本的な意味であるが、具体例で考えてみよう。ファストフードレストランで、For here or to go? という時の to go は<これから>持ち帰るという未来志向的な状況を表している。また、野球の実況中継で、Going, going, going, gone! という時の going は、球が<現に>飛ん<でいる>進行状態、gone は球が客席に<すでに>入って<しまった>完了状態を表している。さらに Go!だと、<まだ行われていない>行くという動作を聞き手に差し向けることで命令を表すことになる。

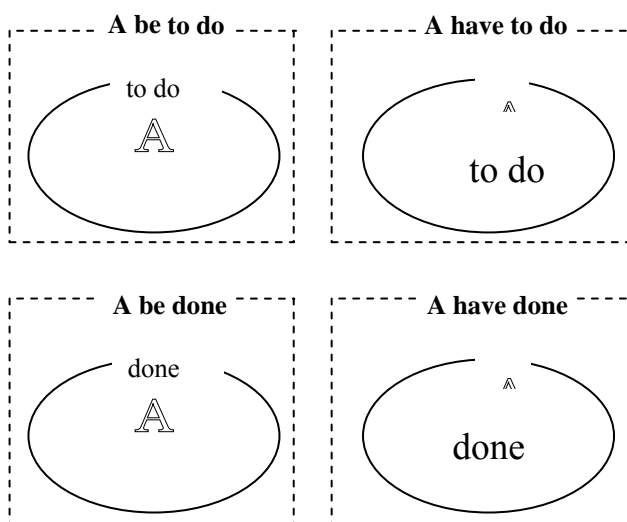
ここで、動詞の見方を変えるために、アスペクト (aspect) という聞きなれない用語を紹介しよう。aspect とは「局面、側面」という意味で、動作や状態の多様な様態を表す概念だ。つまり、動詞のもつプロセスのどの側面にフォーカスを当てるかで、「進行」(現にしている)、「完了」(すでにしてしまった)、「単純」(単に、する)という3つの側面があると考えてよいだろう。be doing が「進行形」、have done が「完了形」を表しているのは、「進行」や「完了」のアスペクトが反映されているからであり、これを特に「進行アスペクト」「完了アスペクト」と呼ぶ (have been doing の組み合わせは「完了進行アスペクト」と呼ぶ)。また、原形 (do) 自体は、どの時間の出来事を語っているかは言い表さないが、現在形 (do/does) を使うと<今、ここ>で現在や未来について語り、過去形 (did) を使うと<今、ここ>で過去を回想して語る、というのが英語の時制 (tense) のシステムである。そして、動詞を doing や done の形にせず現在形や過去形にする場合を「単純アスペクト」と呼ぶ。

現在・単純形	He makes a funny joke.
現在・進行形	He is making a funny joke.
現在・完了形	He has made a funny joke.
過去・単純形	He made a funny joke.
過去・進行形	He was making a funny joke.
過去・完了形	He had made a funny joke.
現在・完了進行形	He has been making a funny joke.
原形(命令表現)	Make a funny joke.

このように BE と HAVE を doing や done と組み合わせることで、時制とアスペクトを広げて豊かな文法表現できるのだ。

BE と HAVE の違い

では、be + to do と have + to do、be + done と have + done の違いを見てみよう。



A be to do も A be done もいずれも「Aがある状況に<アル>」ことを表している。to do が続くときこれから~する状況にアル>、done が続くときすでに~された状況にアル>となる。

これに対して、A have to do や A have done は「Aがある状況を<持つテイル>」ことを表している。to do が続くときこれから~する状況を持つテイル>、done が続くときすでに~した状況を持つテイル>となる。

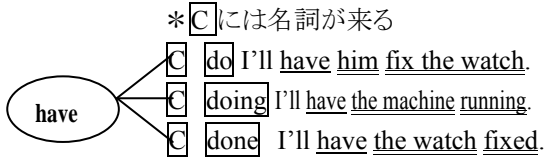
BE はある状況に存在していること、つまり結果に力点が、HAVE はある状況を主体的に所有していること、つまり動作に力点があるため、be to do は客観的な予定や義務を表すのに対し、have to do は主語の持つ予定や義務を表すという違いがある。また、be done は主語以外の人・物による動作の完了状態にあることから「~されている」という受け身を表し、have done は主語による動作の完了状態を所有していることから「~してしまっている」という完了を表すという違いが基本的にある。

例えば、You are to close the door.は客観的に規則で「締めることになっている」、You have to close the door.は主観的に寒いと思うから「締めないといけない」という使用状況の違いがあると考えられる。また、This cup is broken.は誰かが壊した状況にあるから「カップが壊れている」、You have broken the cup は君が壊した状況を持っているから「君がカップを壊してしまっている」という意味合いになる。

では、Winter is gone and spring has come.はどうか。これも同様に考えて be は結果重視、have は動作重視ととらえると、冬が行ってしまった結果になっていて、春がちょうどやって来る動作をしたところだ、と考えるとイメージがつかめるだろう。決して、Winter has gone and spring is come.とはならないのだ。

HAVE の構文可能性の広がり

上述のように、be の状態性に比べて have は主語の動作性・主体性が強いことから、以下のような構文の可能性の広がりがある。



have C do は、C が～する状況を持つことから「C に～させる、してもらう」、have C doing は C が～している状況をもつことから「C に～していてもらう、させておく」、have C done は、C が～されてしまっている状況を持つことから「C を～される、C を～してもらう」という意味合いになる。

このように、have のあとに[C+do / doing / done]という組み合わせが可能なのは、主語が主体的に[C+do / doing / done]という出来事を<持つ>ことが可能だからであって、be にはこのような構文の可能性が広がらないことは、be のもつ状態性から理解できるだろう。このように、構文と動詞の意味が密接に関連していることが、《コア》の発想から見えてくる。

組み合わせでわかる英文法

従来は様々な構文の個々の要素の意味を考慮することなく、構文を一つの形としてそれぞれの意味を暗記項目として教えてきた。ところが、<語>や<語形>の《意味》を重視するLGの発想に立って構文を再検討してみると、構文を構成する<語>や<語形>の《コア》から様々な文法現象が統一的に理解できることがおわかりいただけたと思う。このような発想に立って、文法の理解を促進した上で、文法項目のそれぞれの意味をイメージしながら、様々な文脈の中に出てくる用例を紹介し、英文の《意味》を考える作業を覚えていただければ幸いである。

* * *

文法に意味の息吹を！—LGの活かし方（2）

続いて、これも翻訳とは直接関係ないかもしれないが、『英語教育』（大修館）の同連載で筆者が担当した2008年2月号の論稿を一部加筆・修正して掲げる。ここでは、動詞の～ing形について、『高校英語I』の指導例を紹介している。動詞の～ing形と言えば、真っ先に「進行形」を想起するのは

ないだろうか。そこでまずは、～ing形のコアから進行形のさまざまな意味のつながりを確認しておこう。

動詞の～ing形のコア：<観察可能な動作進行>「現に～している（すること）」

進行形の様々な意味

進行形は、典型的にはある動作が進行中であることを表す。具体的には、

▶ Hey look! The baby chick *is breaking* the egg. (見てごらん。ひよこが殻を割っているよ)

という例でわかるように、

- ① 何か動き・変化が（今・ここで）観察でき、
- ② 何かが現に起こっていて（当面の一時的状態である）、
- ③ 何かが連続的でまだ完結しておらず、途中である

という特徴がある。通常状態を表すlive（住んでいる）、be（～である）といった動詞も、進行形にすると一時的な状態を表す表現（上記②）になる。

- ▶ My father *lives* in Tokyo with me, but now he *is living* in Osaka. (父は僕と東京に住んでいますが、今は大阪にいます)
- ▶ My child *is always noisy*, but he *is being* a good boy right now. (うちの子はいつもうるさいのですが、今だけはいい子にしています)

また、進行形は「まだ続いている動き」を表すため、未完結な状態を表す表現（上記③）にもなる。

▶ Don't put the dishes away. I'm still *eating*. (お皿を片づけないで。まだ食べているんだから)

また、進行形は観察できる状態を描写するため（上記①）、リアルな感じが強くなり、情景を思い浮かべやすくなる。そこで、まだ実際には起こっていない事柄でも、今から気持ちの上で進行していることを思い浮かべながら未来のことを語る事ができる。

▶ We *are asking* another lawyer for help soon. (すぐにももう一人弁護士に手助けをお願いします)

さらに、進行形のリアルな感じが、感情を表す表現としても使われる。例えば、

▶ He always *eats* a lot.

だと、「あの人はいつもたくさん食べる」で単に He の習慣的な行為を説明して、彼の特徴を述べているだけだが、

▶ He *is* always *eating* a lot.

だと、「あの人はいつもたくさん食べてばかりいる」というふうに、いつも食べている状況をリアルかつ鮮明に描写し、時には非難めいた感情まで表すこともできる。

最後に、次の例で単純形と進行形の違いがわかるだろう。

- ▶ Every time I see her, she *cries*. (彼女に会うと、いつも彼女は泣いてしまいます)
- ▶ Every time I see her, she *is crying*. (彼女に会うと、いつも彼女は泣いています)

『高校英語 I』の Passage

では、田中・佐藤・河原が執筆している桐原書店『Pro-Vision I』という高校1年生用の文科省検定教科書からある Passage を引用し、動詞の～ing 形の指導例を考えてみよう。これは、Audrey and Anne というタイトルの章の冒頭である。

In 1943, during World War II, Holland was under the control of Germany. In Arnhem, a town in Holland, a skinny girl was riding a bicycle. She was trying to act naturally, because she was carrying a secret message in her shoe. She was one of the messengers for the Resistance. Her name was Audrey. Later she played a lovely princess and became an actress known all over the world.

文章の冒頭だけあって、読者の関心を引く描写力が感じられる。まず、主語として Holland を立て、オランダに焦点をあてて読者の関心を引く。次に a skinny girl に焦点を当てる。極めて具体的な話から Passage を始めることで、一般論で冷めた論調になりがちな戦争批判論とは違う、読者の関心の引き方が感じられる。そして、She、さらに She を主語に立てることで、一体誰のことを言っているのだから

と読者の想像を駆り立てる。そしてついに、Her name was Audrey. とその正体を明かし、誰でもよく知っているオードリー・ヘップバーンだとわからせることで読者を完全にこの Passage に引き込んでいる。さらに she の述部に追加情報を述べ、オードリーを知らない読者に対する丁寧な説明を施している。

ここで、次のセンテンスを見てみよう。

- ▶ a skinny girl *was riding* a bicycle.
- ▶ She *was trying* to act naturally,
- ▶ because she *was carrying* a secret message in her shoe.

いずれも過去進行形によって過去のある場面を鮮明に、かつ具体的に描いているのだ(前項①②)。普通、過去進行形と言えば、「～していた」と訳して終わり、となってしまうがちだが、ここで過去進行形が使われている効果を考えてみよう。<観察可能な動作進行>が～ing 形のコアであることからすると、まさに戦争中の一場面の中のオードリーの姿がこの riding、trying、carrying という語形によって目に浮かぶ。しかも、「1943年→戦争中→オランダ→アルンヘム→少女」というズームイン方式で具体的な状況を絞り込んだ上で過去進行形を使用して、悲惨な戦争の情景や人々が感じていた辛苦を豊かに表現するというのがこの文章の特徴である。このように、ある文法項目に着目し、その意味が一体どういう状況を語っているのかを具体的かつ鮮明に情景を頭に思い描きながら説明すると、文法項目の意味が生き生きと伝わり、学習者がその項目を自分のものとしてつかむことができるようになるだろう。

動詞の～ing 形の他の用法

では、同じレッスンの別の箇所を引用してみよう。オードリーが、ある映画でアンネの役を演じるよう依頼を受け、自分の戦争中の体験を思い出し、断ってしまったときの一節である。

Anne Frank never knew about Audrey Hepburn, but Audrey learned about Anne by reading her diary published after the war. “Reading her diary was like reading about my own life,” said Audrey.

- ▶ “*Reading* her diary was like *reading* about my own life.”

と、ここでも～ing が使われているが、これは文法

的には「動名詞」である。ところが、ここでも～ing のコアは十分に生きているのだ。実際にオードリーがアンネの日記を読んでも、あたかも自分の人生について読んでいるような気がした、というもので、オードリーが実際にアンネの日記を読んでいる情景が鮮明に伝わってくる。

この動名詞の用法は、例えば、*reading and writing skills* (読み書き能力) といったように前々項の①の意味が完全に概念化したものもあれば、この用例のように～ing の動きが感じられるものまで、意味に幅があることも付け加えておきたい。

その他、～ing 形が使われている箇所をこのレッスンから引用してみよう。

- ▶ She traveled through many countries to help children *suffering* from war and hunger.
- ▶ One day, Audrey met a 14-year-old boy *suffering* from illness in a refugee camp in Sudan, Africa.
- ▶ I think she is happy that today her words give comfort to so many children *having* a hard time.

文法的にはこれらは「現在分詞の後置修飾用法」となる。しかし、～ing 形のもつ情景描写力に鑑み、*children suffering from war and hunger*, *a 14-year-old boy suffering from illness in a refugee camp*, *so many children having a hard time* という表現が、人間のどのような悲惨な状況や幸せな場面を具体的に語っているかも、教科書指導を通して是非説明して頂ければ、執筆冥利に尽きると言っても過言ではない。

文法の意味から状況の意味の構成へ！

最後に、このレッスンの最終段落の冒頭を紹介したい。「人間」という表現の背後にある文法性から、英語における「人間」像が見えるだろう。

Although Anne had a hard time, she always kept her respect for *human beings* and her hope for peace.

この *human being* という表現。この *being* は現前と存在をしている、という動作からその動作主へと対象をずらすことによって「存在・生存・実在・生命・生き物」を表す語として使われる。これは、*be* と～ing を融合することで、「まさに今・ここで存在している」という意味合いがあり、単に目の前にいる *presence*、際立ってあるという *existence*、実体として存在しているという *entity* とは違い、動きが鮮明に感じられるダイナミックなニュアンスのある言葉である。それに *human* をつけることによって、

human being は人間として今まさにここに生きている、その主体としての人、脈打つ生命を持った存在としての人、ということを表す表現になる。そういう存在である<人間>に対し、アンネが常に敬意を表し、平和を願ったことが読み取れる。

～ing という一つの文法項目から、様々な状況や人間模様を読み取る面白さ、楽しさを是非伝えて頂きたい。その際、本稿で示したように、一つの項目を取り上げてそれが使われているセンテンスを列挙して比較したり、前後の文脈とのつながりを分析してそのことばのもつ効果を味わったりするのも、有効だろう。

* * *

文法に意味の息吹を！—LGの活かし方(3)

最後に、翻訳における原文理解と訳出の関係にも言及してある、『英語教育』(大修館)の同連載で筆者が担当した2008年1月号の論稿を一部加筆・修正して掲げる。ここでは、実践指導例として文科省検定教科書『高校英語I』を使って、1つ1つの<語彙>の意味を大切に感じ取りながら、リーディングの実践指導のやり方を説明している。素材は、「ことばが世界を変える」と副題をつけたい、12歳の少女による地球サミットでのスピーチである(本原稿では、原文を引用)。

英語を英語として考えるとは？

「英語を英語として考える指導」とは何かについて議論されることもあるだろうが、端的に言うと、英語から直接事態構成ができる指導をすることである。例えば

You have a good sense of what is going on.

という英文を、従来の英文和訳式で読み解くと、「あなたは何が起きているかについてのよい感覚を持っている。」となり、直訳ではいかにも違和感があるので、「あなたは何が起きているかについてよく感じ取っている。」と意識せよ、という指導がなされているのが大方のやり方であろう。ところが考えてみるとこの指導のプロセスは<英語→直訳(→意識)→意味>という手順を踏んでおり、本来あるべき<英語→意味>というストレートな回路を和訳という作業が阻害している。では、LGではどうだろうか。

You : 「(今ここにいる)聞き手 / (今ここで読ん

でいる) 読み手」

have : 「(今) (何かを自分のところに) 持つ」

a : 「複数あるものから1つ取り出す」機能

good : 「評価が高い」(悪くないから完璧まで)

sense : 「ピンとくる感覚」

of : 「切っても切れない関係」の表示機能

what : 「何かわからないものを問う/漠然と示す」
機能

is : 「(今) (何かがどこかに) ある」

go : 「(視点のあるところから) 離れていく」

~ing : 「(何かを) している」=進行アスペクト

on : 「接触関係」の表示機能→(時間的) 継続

ここに示したのがコア(語の中核的意味)で、話し手・書き手はことばを紡ぎ出すことによって、これらを融合して豊かな意味世界を表出できる、というのがLGの基盤になっているコア理論の発想である。読み手からすると、このセンテンスは

You [今ここでこれを読んでいる読み手の皆さんは] →have [自分の所有・経験空間に持っている] →a good sense [鋭くピンと来る感覚を(1つの行為として)] →of [ピンと来る感覚の対象は?] →what is [漠然と何かがある] →going on [継続しずっと進行している]

つまり、「読者の皆さんは世の中で何が起きているか鋭くピンと来ていますね」とか、「皆さんは状況をよく把握していらっしゃいます」などという訳出が可能になる。これは、1語1語のコアを融合させることで頭の中で意味が構成され、それを読者を想定した発言として文脈に適応させて自由に訳出した結果得られた訳文であって、あくまでも<英語→意味→訳出>という手順を踏んでいることに注意したい。このように、和訳は本来、英語から直接頭の中で事態構成ができていれば文脈に合わせて自由に作れるものであり、英語教育を行う文脈の中でも、あくまでも事態構成が的確にできているか確認する補助手段として使ってゆくことが、英語を英語として考える指導になると言える。

英語を英語として、英語の発想順で考える!

では、教科書の実例を検討してみよう。カナダ出身の12歳のSevern Suzukiさんが1992年開催のリオデジャネイロでの国連地球サミットで、世界各国のリーダーを前に6分間のスピーチを堂々に行ったものからの引用である(桐原書店『PROVISION I』8課参照)。

I used to go fishing in Vancouver, my home, with my dad until just a few years ago we found the fish full of cancers. And now we hear of animals and plants going extinct every day, vanishing forever.

故郷バンクーバーで昔よく父と魚釣りに行っていたが、数年前に魚がガンに侵されているのを目の当たりにした、という第1文に続く第2文を検討してみよう。まずは特筆すべきコアを先に解説しておこう。

hear : 「(耳が機能して声や音が) 聞こえる」

of : 「切っても切れない関係」=出所と帰属

go : 「(視点のあるところから) 離れていく」→結果に焦点を当てると、「(離れた結果~の状態)になる」

hear of は、of が hear の対象である音や声の出所を表し、hear of で「~のことを聞く、噂で聞く」という意味合い、また go extinct は、「(事態が進行した結果) 絶滅の状態になる」という意味合いとなる。

では、実際のスピーチに現われている音声上の切れ目を基に意味のまとまり(チャンク)で区切ってみよう。

And now / we hear of animals and plants / going extinct / every day, / vanishing forever.

これを基に、今度は従来のスラッシュ・リーディングやフレーズ・リーディングの手法で訳を施してみよう。

And now (そして今)/ we hear of animals and plants(私たちは動植物のことを耳にする)/ going extinct(絶滅している)/ every day,(毎日)/ vanishing forever.(永久に消えている)

ご覧の通り、この手法は、ややブツ切りの日本語をチャンクごとに当てている。順送りに意味を取って順送り理解を促そうとしている点は、言語の本来の処理のあり方を反映していて優れている。しかしこの手法には順送り理解を支える文法観がなく、本質的に従来の枠組みを出ない。ところが、LGを導入することで、チャンクごとの意味の構築の仕方が見えてくる。では、[] 内に意味構築のやり方を具体的に示してみよう。

And now / そして今〔副詞が来た。数年前に魚がガンで侵されていることに加えて何がどういふ状況か？S+V～と来るはず〕

we hear of animals and plants / 私たちは動植物のことを耳にする〔動植物がどうだというのだろうか？魚と同じ状況だろうか？〕

going extinct / 絶滅している〔まさに絶滅へと進行している状況。～ing の形式によって、眼前に動植物が死に絶えて行っている様子が鮮明にイメージされる〕

every day, / 毎日〔まさに毎日絶滅して行っている、という強調の意味が込められている〕

vanishing forever. 永久に消えている〔同じ意味内容と同じ～ing 形を使って繰り返すことで、畳み掛けるように強調している〕

ここで Severn さんの主張を鮮明に読み解く鍵は、～ing という形式である。つまり、動植物のことをよく耳にするが、それはまさに状況が悪化して extinct へと going している姿、しかも every day 毎日のように様々な種が死に絶えている姿、さらに vanishing forever 永久に消えていってもう戻ってこない姿を描いているのだ。

ところが、構造分析が主眼になりがちな従来の文法だと、前置詞 of があるので going は animals and plants を意味上の主語とする動名詞ではないか、いや、going は後置修飾の現在分詞ではないか、いやいや、hear of を1つの知覚動詞と考えて going は目的格補語としての現在分詞ではないか、、、などという用法峻別に関心が行き、going のもつ「意味」をなおざりにしてしまいがちだ。

しかし、LG の発想だと、～ing は「状態を示す分詞であれ名詞概念を示す動名詞であれ、＜何かをしている＞というイメージでつながっている」と捉え、用法峻別を行わなくともストレートに英語から事態が構成できる。しかも、チャンクの発想と融合することで、Severn さんの発想順で意味を構築するため、彼女の息遣いや力の入れどころを彼女が発した英語そのものから直接鮮明に感じることができる。

12歳の少女のスピーチの息遣い

では、先ほど検討した箇所の直前を見てみよう。

I am here to speak for all generations to come. I am here to speak on behalf of the starving children around the world whose cries go unheard. I am here to speak for the countless animals dying across this planet because they have nowhere left to go.

特筆すべきコアを記すと、

to : 「向き合った関係」の表示機能→(不定詞) 未来志向

for : 「対象に向かって指差す関係」の表示機能

では、LG で読み解いてみよう。

I am here [私がここ(サミットの議場)にいる] 状況と相対して to speak [これから話をする]、それは for all generations [すべての世代の人たちのことを指差して考えながら]、それは to come [今後生を受けて世に来るべき人たちなのです]

順送りで意味を捉えることで、Severn さんの息遣いが感じられるだろう。では、次のセンテンス。

I am here to speak [私がここでこれから話をするのは] on behalf of the starving children [今まさに飢えていっている子どもたちの代わりなのです] around the world [世界のいたるところにそういう子どもたちがいます]、そして whose cries [その子どもたちの叫び声は] go unheard [誰にも聞かれないままだ声だけがどこかへ離れて行っているのです]

I am here to speak の反復によって、次に述べる箇所が焦点化されて強調されている語りの力もよく読み取れる。では、次のセンテンス。

I am here to speak [私がここでこれから話をするのは] for the countless animals [数え切れないほどの動物を指差して考えながら]、それは dying across this planet [この惑星の至るところで死んでいっているのです] because they have nowhere left [理由は、動物にはどこも残されていないからです] to go [これから行くための場所が]

I am here to speak のさらなる反復によって、サミットの議場の演壇に立っている自分の存在を前面に出しつつ、その目的が来るべき世代の人たち、飢えている子ども、そして死に絶えている動物たちの代弁なのだ、という態度を議場にいる大人たちに堂々と主張している姿が大変鮮明に読み取れる。

もうここまで来た段階では、generations to come の不定詞は形容詞用法で to come を generation に訳し上げていくとか、「go unheard=無視される」と

丸暗記するとか、nowhere left to go の left は過去分詞で後置修飾をしていて、これと to go という形容詞用法の不定詞とどちらを先に訳すか迷ったりする、などといったやや迂遠なプロセスを飛ばして、英語からストレートに意味を構築できるだろう。

ことばの意味の捉え方が変わる

従来、リーディング指導で順送り理解を促すために、スラッシュ・リーディングとかフレーズ・リーディングといった指導法が考案されてきた。しかし、これと文法指導とを直結する本格的な文法理論（直読直解に資する文法理論）が欠如した形で指導がなされているのが現状であろう。これはリスニング指導についても同じである。

今回は、文法のもつ意味を考える上で、用法峻別ではなく、1語1語の<意味>を丁寧に感じ取ることを大切にしながら、「ことばが世界を変える」スピーチの息遣いを一緒に考えてきた。文法の意味を一つ一つ大切に考えることで、直読直解も可能になる。このLGが、「ことばの意味の世界が生きたものへと変わる」契機になれば幸いである。

* * *

まとめ—翻訳指導におけるLGの活かし方

繰り返しになるが、このLGは語彙の意味に着目をして英文法理論に意味を復権させることが特徴である。原文である英語の解釈に当たり、英文の文法構造は解明できたが、意味がピンと来ない、という事態を避けるためには、語彙の意味に立脚した事態構成ができる文法の理論的枠組みが必要であり、かつ、その枠組みに準拠した翻訳指導の方法論も必要になってくる。従来の学校文法・伝統文法の枠組みで思考している（と自認している）一般の英語使用者や翻訳者であっても、認知的スタンスからその意味処理を明示的に考察すると、本稿のように説明が可能になるのである。したがって、この枠組みに依拠した、翻訳指導における原文からの事態構成の方法を理論化することが必要だと筆者は考えている（註2参照）。

本稿で取り上げた事例は、be、have、動詞～ing形、不定詞、過去分詞などで、LGが扱う文法項目のごく一部である。LGや、その母体であるコア理論に関して、今後も「通訳通信」で取り上げながら、翻訳プロセスないし翻訳行為の解明を行いつつ、それを翻訳指導にいかに応用すべきかについて、考えてゆきたい。

註

- 1) Lexical Grammar はハリデイが導入した lexico-grammar とは異なる (Halliday & Matthiessen 2004, pp. 43-46)。選択体系機能言語学では、本稿で取り上げた趣旨の（認知意味論に依拠した）語彙意味論から編成した語彙文法論は展開されていない。
- 2) 認知的スタンスを押し進めるならば、①「心的表象」(mental representation) と②「情報処理」(information processing) の2つを本格的に融合する必要があり、意味構造論としてのコア理論が、現実の言語処理の中でどのような姿で原理的に働いているのかを詳らかにする必要があるはずである。そこで筆者は、②を言語処理理論に組み入れた「オンライン処理」(河原 2008) に基づいた「オンライン英文法」を考案中である。これは、実際の言語処理においても、メンタル・レキシコンに格納されている意味記憶の実相に照らしても、多義語は多義的に処理（翻訳においては水平的処理）されることが多いことを正面から受け止めて理論化を試みるものである。
- 3) この点、深谷・田中 (1996) は、木田元 (1990) の「事実存在」と「本質存在」という概念を導入している (深谷・田中 1996, p. 313)。「X が存在する」という場合、前者を「X がある」、後者を「X である」とする。

参考文献

- ARCLE 編集委員会 (編著) (2005) 『ECF: 幼児から成人まで一貫した英語教育のための枠組み』リーベル出版
- 深谷昌弘・田中茂範 (1996) 『コトバの<意味づけ論>』紀伊国屋書店
- 原口庄輔・田中茂範・武田修一・河原清志ほか (2006) 『PROVISION 高校英語 I』桐原書店
- 河原清志 (2008) 「言語のオンライン処理と語彙・構文のプロセス意味論—英語基本動詞の事例研究」『異文化コミュニケーション論集』第6号, 立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科 (編) (pp. 121-134)
- 木田元 (1990) 『ハイデッガーの思想』岩波新書
- 佐藤芳明・河原清志・田中茂範 (2007-2008) 「コア理論で文法指導: レキシカル・グラマーへの誘い」『英語教育』大修館、2007年4月～2008年3月に毎月連載
- 佐藤芳明・田中茂範 (2009) 『レキシカル・グラマーへの招待』開拓社
- 田中茂範・佐藤芳明・阿部一 (2006) 『英語感覚が身につく実践的指導 コアとチャンクの活用法』大修館書店
- 田中茂範・佐藤芳明・河原清志 (2003) 『チャンク英文法』(コスモピア)
- 田中茂範・武田修一・川出才紀 (編) (2003) 『E ゲイト英和辞典』ベネッセコーポレーション
- Toury, G. (1995). *Descriptive translation studies and beyond*. Amsterdam: John Benjamins.